

## 幼児のコミュニケーション能力に関する 指導法についての一考察

—保護者と保育者の自由記述を基にしたテキストマイニングによる分析—

岸 正寿 角内 万三 戸田 大樹 佐久間 良恵 高橋 広美

### 要約

本稿は、認定こども園の1～5歳児の園児の保護者63名と、保育者24名を対象に、保護者と保育者の自由記述を基にしたテキストマイニングによる分析を行い、保護者と保育者の幼児のコミュニケーション能力に関する意識の比較を通して、幼児のコミュニケーション能力に関する指導法についての知見を得ることを目的として行った。その結果、保護者と保育者が共通して幼児のコミュニケーション能力が育っている場面としてとらえていたのは、「友達」と「遊ぶ」場面や、「伝える」場面であった。保護者も言葉の重要性を感じていたが、保育者は、「自分」の「気持ち」を「言葉」で伝える場면을大切にしていた。また、「言葉」で「伝える」ことがうまくいかず「泣く」「姿」のような葛藤する場面、「子ども」「同士」の「貸し借り」をする「姿」、相互交渉する場面も保育者は幼児のコミュニケーション能力が育っている場面ととらえていたことが明らかになった。保育者は保護者に対して、「言葉」で伝える際に、上手くいかない際にもその葛藤を支え、子どもの思いを代弁しながら支持していくかわりが求められることが示唆された。

### I. 問題と目的

気持ちが通じ合う、心が通じ合うことをcommune（コミュニケーション）という。この気持ちや心が通じ合う状態にしていくことをcommunication（コミュニケーション）というのである。

ベネッセ教育総合研究所（2022）は、「第6回幼児の生活アンケート」首都圏の乳幼児を持つ4030名の保護者に質問紙調査を行い過去5回の調査と比較した結果、子どもの成長・発達や子育てについて気になっていることとして、同年代の友達とのかかわりが減少したこと、子どもとのかかわり方、子育て交流の減少に不安を感じていることを指摘している。このことから、保護者は子ども同士のかかわりの減少、保護者自身のコミュニケーションを図る機会の減少を感じていることが明らかになった。

鯨岡（1997）は、コミュニケーションとは受け手が伝えられた言葉などから、伝えようとした思考や観念を受けての中に再構築して把握した時に初めて成立すると指摘している。さらに人は原初的コミュニケーションにあたる、感情などの共有を目指す「感性的コミュニケーション」と、道具的な目的にある場面で、言葉等を用いて正確な情報伝達とそれについての相手の理解を得ることを目指す「理性的コミュニケーション」を持ち、よりよいコミュニケーションを目指すにはまず豊富な気持ちや感情の共有をする経験が必要不可欠であると指摘している。

コミュニケーションを育むうえで、言葉を獲得する能力というものは、人間が生まれながらに持っている能力の一つで、人間だけがもつコミュニケーション手段であるといえよう。

文部科学省は、国際化の進展に伴い、多様な価値観を持つ人々と協力、協働しながら社会に貢献することができる創造性豊かな人材を育成することの重要性を踏まえ、2010年に「コミュニケーション教育推進会議」を設置した。

文部科学省（2011）は、「コミュニケーション教育推進会議審査経過報告」の中で、子どもたちの現状や課題として、子どもたちは気の合う限られた集団の中でのみコミュニケーションを取る傾向があること、インターネットを通じたコミュニケーションが子どもたちに普及している一方、外遊びや自然体験の機会の減少により、身体性や身体感覚が乏しくなっていること、他者との関係作りに負の影響を及ぼしていることを指摘している。

さらに、同報告の中で、コミュニケーション能力とは、「いろいろな価値観や背景を持つ人々による集団において、相互関係を深め、共感しながら、人間関係やチームワークを形成し、正解のない課題や経験したことのない問題について、対話をして情報を共有し、自ら深く考え、相互に考えを伝え、深め合いつつ合意形成・課題解決する能力」と定義している。

日本経済団体連合会は、2018年時まで行った「新卒採用に関するアンケート調査結果」において、企業が採用選考時に重視する要素として16年連続「コミュニケーション能力」が第1位であると指摘している。よりよい人間関係を築くうえで他者とコミュニケーションを図るスキルが必要不可欠であると考ええる。

篠原・小林（2019）は、幼児のコミュニケーション能力に関して保育所保育士と保護者を対象にして調査を行った結果、コミュニケーションの困難さ・集団生活上の困難さとしての「こだわり」を多くの保護者が「わが子は物知りですごい」と肯定的に評価しており、こうしたこどもの発達についての認識のずれが、保護者と保育者が子どもの特徴を共通理解する際の障壁となっていることを指摘している。

以上を踏まえ、幼児期の子どもに極めて重要であるコミュニケーション能力に関する保育者と保護者の意識の差異に着目した示唆的な研究は少ないため、幼児のコミュニケーションに関する適切な指導法についての検討が必要である。

本研究の目的は、保護者と保育者の自由記述を基にしたテキストマイニングによる分析を行い、幼児のコミュニケーション能力の形成に関する保護者と保育者の意識の差異に着目し、幼児のコミュニケーションに関する指導法についての知見を得ることを目的とする。

## Ⅱ. 方法

### 1. 研究機関と調査対象

#### 1) 対象地域・対象者

調査対象者は、各施設の園長に研究説明・依頼を行い、協力の承諾を得られた川崎市内にあるA認定こども園の園児の保護者63名（1～5歳児の保護者）と、保育者24名（保育者経験年数6.54年）であった。

園児の保護者に対しては、2022年3月にインターネットによる調査メールを配信してインターネットでの回答を247名に依頼した。回収数は65名であり、このうち欠損値があるものを除く有効回答数63名（有効回答率26.3%）を分析対象とした。

園の保育者に対しては、2022年2月にインターネットによる調査メールを配信してインターネットでの回答を51名に依頼した、有効回答数は24名（有効回答率47.1%）を分析対象とした。

#### 2) 調査期間

保護者に対しては、2022年3月3日～2022年3月14日であった。

保育者に対しては、2022年2月21日～2月28日であった。

### 2. 調査内容

#### 1) 保護者に対しての調査メール

##### ①フェイスシート

年齢、園児との関係、子どもの性別、子どもの年齢

##### ②質問シート

・あなたのお子様のコミュニケーション能力が育っていると感じる場面について（自由記述）

・幼児のコミュニケーション能力とは、具体的にどのような資質・能力のことを指していると考えていますか（自由記述）

・あなたのお子様はコミュニケーション能力が高いと思いますか（4件法）

・あなたのお子様のコミュニケーション能力が高い・低いと思う理由を教えてください（自由記述）

##### ③回答者の属性

年齢は、20代4名（1.6%）、30代40名（63.4%）、40代19名（30.2%）であった。園児

との関係では、母が59名（93.7%）、父が4名（6.3%）であった。子どもの性別は、男児33人（52.4%）、女児30人（47.6%）であった。子どもの年齢は、2歳児7名（11.1%）、3歳児11名（17.5%）、4歳児27名（42.9%）、5歳児18名（28.5%）であった。

## 2) 保育者に対する調査メール

### ①フェイスシート

年齢、性別、担当クラス、職位、保育経験年数

### ②質問シート

・あなたが幼児のコミュニケーション能力が育っていると感じる場面について（自由記述）

・幼児のコミュニケーション能力とは、具体的にどのような資質・能力のことを指していると考えていますか。あなたが担当する幼児を対象に考えてください（自由記述）

### ③回答者の属性

保育者の回答者の属性については表1に示す。

表1 保育者の回答者の属性について

年齢	性別	クラス	職位	保育経験年数
20代	女性	4歳児	担任	3年
20代	女性	3歳児	担任	3年
20代	女性	2歳児	担任	1年
20代	女性	2歳児	担任	1年
20代	女性	3歳児	担任	1年
20代	女性	1歳児から5歳児	保育補助	2年
20代	女性	1歳児	担任	2年
20代	女性	3歳児	担任	2年
20代	女性	2歳児	担任	1年
20代	女性	3歳児	副担任	3年
30代	女性	3歳児	補助	1年
30代	女性	3歳児	保育補助	1年
30代	女性	1歳児	保育補助	1年
30代	女性	4歳児	補助	10年
40代	女性	3歳児	保育補助	1年
40代	女性	2歳児	保育補助	16年
50代	女性	保育棟	保育教諭	1年6ヶ月
50代	女性	1歳児	保育補助	2年
50代	女性	1歳児から5歳児	保育補助	3年3ヶ月
50代	女性	3歳児	保育補助	4年
50代	女性	1歳児	担任	26年
50代	女性	掃除	保育補助	2年
50代	女性	2歳児	保育補助	2年
70代	女性	1歳児	主任	49年

年齢別人数では、20代10名、30代4名、40代2名、50代7名、70代1名であった。性別は、女性24名で、平均保育者経験年数6.54年であった。

### 3. 倫理的配慮

本研究では、倫理的配慮として、本研究の調査協力が得られた保護者に本研究の主旨と調査協力の依頼を行った。その際に、研究への参加は自由意志であり、途中不都合が生じた場合はいつでも中断することができること、また、それによる弊害はないこと、個人名は特定しないこと、これに関連した研究以外には用いないこと、データは公の場で発表することを伝え、同意を得た保護者のみを調査の対象とした。

### 4. 分析方法

記述の自由度が高いテキストデータの処理においては、客観性の保持と恣意性の排除が要であり、テキスト型データを統計的に分析するテキストマイニングは、自由記述の分析方法の一つと知られている。計量テキスト分析を行うフリーソフト「KH Coder」(樋口2014)を使用。調査回答をテキスト化した。さらに分析対象となったテキストデータの複合語の検出を東京大学情報基盤センター図書館電子化部門・中川研究室にて公開されている、専門用語(キーワード)自動抽出システム「Term Extract」を利用し、検出。検出された複合語で複合語として抽出すべき単語を強制抽出語として入力し、前処理を行い、分析を行った。分析方法としては、頻出150語の抽出語リスト、頻出語クラスター分析、共起ネットワークを使用した。

## Ⅲ. 結果

### 1. コミュニケーション能力が育っていると感じる場面についての保護者の語り

#### 1) 頻出語リスト

幼児のコミュニケーション能力が育っていると感じる場面についての保護者の語りの出現回数順に頻出語を抽出した(表2)。

表2 幼児のコミュニケーション能力が育っていると感じる場面について(保護者の語り)

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
友達	26	コミュニケーション	3
自分	21	挨拶	3
話す	21	一緒	3
感じる	11	楽しい	3
伝える	10	泣く	3
言う	10	見る	3
会話	9	言葉	3
気持ち	8	語彙	3
出来る	7	歳	3
遊ぶ	7	姿	3
子ども	7	出る	3
相手	6	場面	3
増える	6	親	3

人	6	怒る	3
先生	5	入園	3
理解	5	能力	3
育つ	5	聞く	3
思う	4	名前	3
説明	4	話しかける	3
幼稚園	4		

質問項目全体の総抽出語数は、1,643語、異なり語数は、372語であった。「友達」が最も多く26回、次いで「自分」「話す」が21回、「感じる」が11回、「伝える」が10回の順で多く使用されていた。保護者は、「友だち」とのかかわり場面や、「話す」「伝える」力を幼児のコミュニケーション能力と考えていることが示唆された。

## 2) 階層的クラスター分析

異なる性質のものが混ざった集団の中から、パターンの似通った語の組み合わせにどのようなものがあるのか探るため、階層的クラスター分析を用いて検証した（図1）。

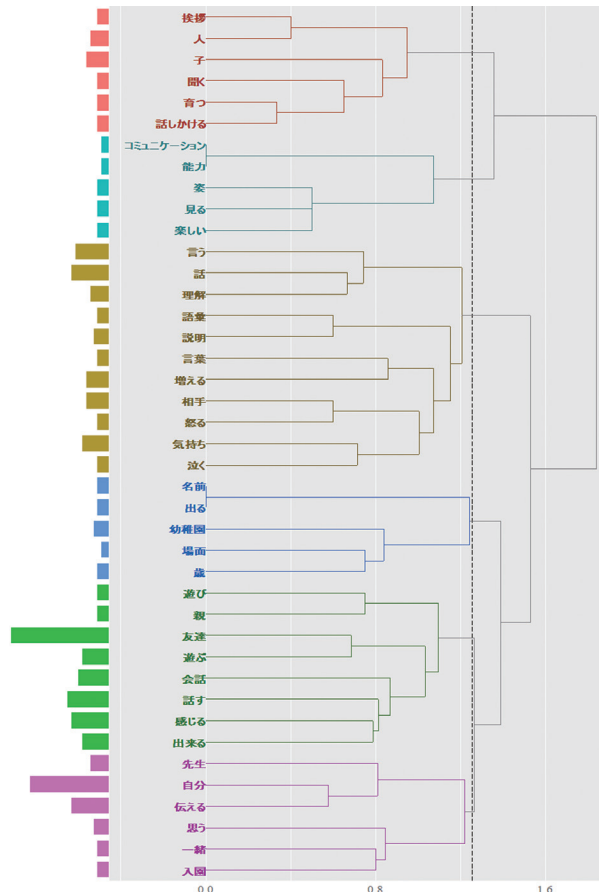


図1 頻出語クラスター分析によるデンドログラム（保護者の語り）

保護者が感じる幼児のコミュニケーション能力が育つ場面として、「人」に「挨拶」をする、「話しかける」、「言葉」が「増える」が連想された。「幼稚園」にいる「お友達」の「名前」を聞く「場面」が連想された。「自分」で「先生」に「伝える」が連想された。

### 3) 共起ネットワーク分析

共起ネットワークとは、出現パターンの似通ったもの、すなわち共起関係を線で結んだものである。共起ネットワークの結果は図2に示す通りである。

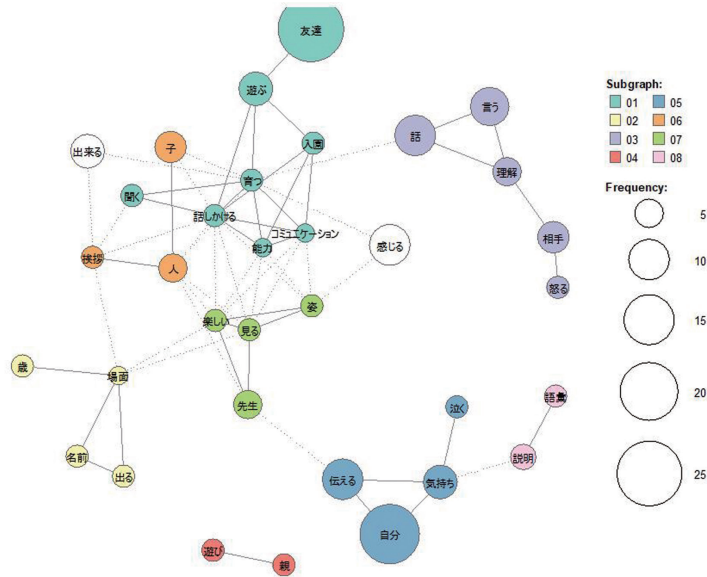


図2 共起ネットワーク図（保護者の語り）

保護者が感じる幼児のコミュニケーション能力が育つ場面として、「自分」の「気持ち」を「伝える」が連想された。

「話しかける」「能力」が連想された。

「友達」と「遊ぶ」場面が連想された。

## 2. コミュニケーション能力が育っていると感じる場面についての保育者の語り

### 1) 頻出語リスト

幼児のコミュニケーション能力が育っている感じる場面についての保育者の語りの出現回数順に頻出語を抽出した（表3）。

表3 幼児のコミュニケーション能力が育っていると感じる場面について（保育者の語り）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
言葉	16	友達	4
子ども	15	やり取り	3
場面	10	アンパンマン	3
気持ち	9	一緒	3
伝える	9	園	3
見る	8	関わり	3
姿	8	見つける	3
自分	8	言う	3
同士	8	思い	3
保育	8	思う	3
泣く	7	時間	3
遊び	7	女兒	3
感じる	6	成長	3
貸し切り	6	相手	3
育つ	5	表す	3
多い	5	表現	3
クラス	4	表情	3
コミュニケーション能力	4	物	3
子	4	友だち	3
手	4	欲しい	3
声	4		

質問項目全体の総抽出語数は、1,348語、異なり語数は、349語であった。「言葉」が最も多く16回、次いで「子ども」15回、「場面」10回、「気持ち」「伝える」9回であった。保育者は幼児のコミュニケーション能力が育っている場面で「言葉」が重要であると認識していることが示唆された。また、「泣く」が7回で、「泣く」場面が、幼児のコミュニケーション能力が育つ場面と認識している点は保護者には見られなかった点である。保護者と同様に、「気持ち」を「伝える」ことが9回で多く出現していた。

## 2) 階層的クラスター分析

異なる性質のものが混ざった集団の中から、パターンの似通った語の組み合わせにどのようなものがあるのか探るため、階層的クラスター分析を用いて検証した（図3）。



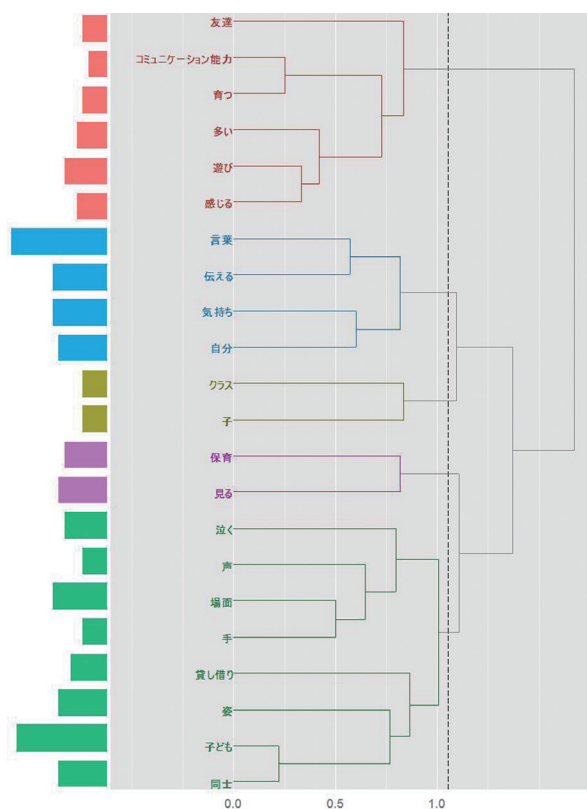


図3 頻出語クラスター分析によるデンドログラム（保育者の語り）

保育者が感じる幼児のコミュニケーション能力が育つ場面として、「子ども」「同士」の「貸し借り」する「姿」が連想された。「自分」の「気持ち」を「言葉」で「伝える」が連想された。「友達」と「遊ぶ」中で「コミュニケーション能力」が「育つ」ことを「多く」「感じる」が連想された。

子ども同士の貸し借り場面は、保護者には見られなかった点である。

### 3) 共起ネットワーク分析

共起ネットワークとは、出現パターンの似通ったもの、すなわち共起関係を線で結んだものである。共起ネットワークの結果は図4に示す通りである。

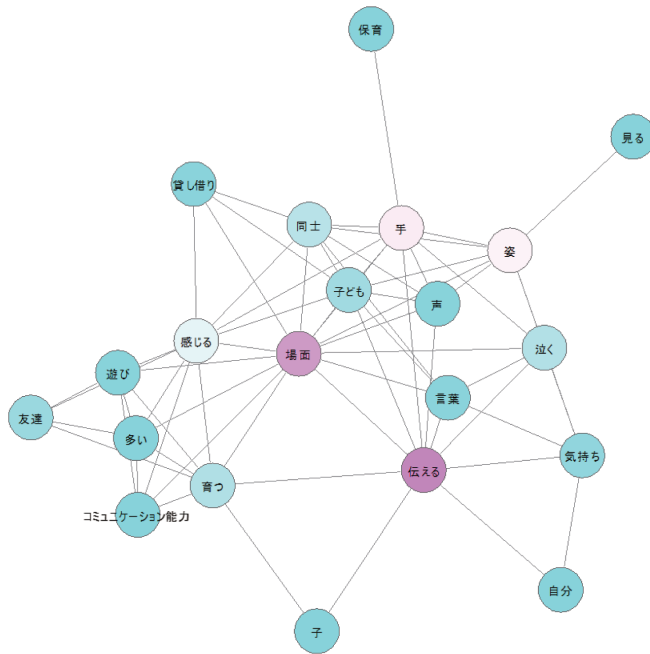


図4 共起ネットワーク図（保育者の語り）

保育者が感じる幼児のコミュニケーション能力が育つ場面として、「自分」の「気持ち」を「言葉」で「伝える」「泣く」「姿」が近くにあることから、言葉で伝えることがうまくいかないで「泣く姿」もコミュニケーション能力が育つ場面であると保育者は感じていることが示唆された。

#### IV. 考察・まとめ

保護者と保育者の幼児のコミュニケーション能力が育つ場面についての語りをテキストマイニング分析を行った結果を比較したものが以下である（表4）。

表4 分析別「保護者と保育者の語りの比較」

	保護者	保育者
頻出語	「友達」「自分」「話す」 「感じる」「伝える」	「言葉」「子ども」「気持ち」 「伝える」
クラスター分析	「人」に「挨拶する」 「話しかける」 「言葉」が「増える」 「幼稚園」の「友達」の「名前」を「聞く」	「子ども」「同士」の「貸し借り」をする「姿」 「自分」の「気持ち」を「言葉」で「伝える」 「友達」と「遊ぶ」中で「コミュニケーション能力」が「育つ」
共起ネットワーク	「自分」の「気持ち」を「伝える」 「話しかける能力」 「友達」と「遊ぶ」	「自分」の「気持ち」を「言葉」で「伝える」 「言葉」で「伝える」ことがうまくいかず「泣く」「姿」

保護者と保育者が共通して幼児のコミュニケーション能力が育っている場面としてとらえていたのは、「友達」と「遊ぶ」場面や、「伝える」場面であった。

保育者は、「自分」の「気持ち」を「言葉」で伝える場面を大切にしていることが明らかになった。また、「言葉」で「伝える」ことがうまくいかず「泣く」「姿」のような葛藤する場面もコミュニケーションが育つ場面と考えていた。また、「子ども」「同士」の「貸し借り」をする「姿」、相互交渉の場面も保育者は幼児のコミュニケーション能力が育っている場面ととらえていたことが明らかになった。

一方、保護者も、「人」に「挨拶する」こと、「話しかける能力」「言葉」が「増える」こと、「幼稚園」の「友達」の「名前」を「聞く」など「言葉」の重要性を感じていることが示唆された。

前田（2020）は、言葉はコミュニケーションの手段であり、人とのかかわりに大きく影響を与えるものであり、思考力や自我の確立など子どもの心と体の発達に欠かせないものであると指摘している。特に乳幼児期の母親や保育者のかかわりが子どもの言葉の獲得に影響を与え、生まれたときから始まる言葉かけや、愛情のある応答的なかかわりを基に、大人との愛着関係を築くことから言葉の発達は始まっていくことを指摘している。

本研究の結果から、保育者は保護者に対して、「言葉」で伝える際に、上手いかわからない際にもその葛藤を支え、子どもの思いを代弁しながら支持していくかかわりが求められることが示唆された。

子どもが言葉を獲得するまでにはたくさんの発達の過程やプロセスがある。幼児との愛着関係や信頼関係という人と人の絆を構築していくことが最も重要であると考えられる。この情緒的な絆がなければ、「言葉」を必要としない世界に子どもを閉じ込めてしまうことに繋がるのではないか。

小椋ら（2019）は、言葉が果たす5つの役割として、以下の点を挙げている。

- ① 他者とのコミュニケーションを図る：欲求、要求、感情、考え、経験、知識を他者と共有できる。
- ② 物事を考える（思考）：物事を知ったり、考えたりできる。乳児が出会う言葉は将来に必要な学力、問題解決能力などの基礎になる。
- ③ 行動をコントロールする：言葉を獲得し、言葉の理解が深まると、人から言われなくても行動を制御できるようになる。
- ④ 自分を表現する（自己表現）：自分の思い、要求、個性、能力を周囲に表現する手段として利用できる。
- ⑤ 自我を育む：「私が私である」という自我の形成に中心的な役割を果たす。「私」の心の成長には言葉による志向や表現が欠かせない。

つまり、「言葉」を獲得することで子どもは大きく精神発達を遂げ、考えることで課題解決の方法を学ぶことができるということである。

文部科学省（2022）は、『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について（答申）」の第Ⅱ部各論、「令和の日本型学校教育を担う教師に求められる資質能力の中で、教育を担うにあたり必要となる素養に、倫理観、使命感、責任感、教育的愛情、総合的な人間性、コミュニケーション力、想像力、自ら学び続ける意欲及び研究能力を挙げている。

これからも、保育者自身がコミュニケーション能力を高めていきながら、幼児との愛情のある応答的なかかわりを基に愛着関係を築いていくことが求められている。

## V. 今後の課題

本研究の課題は、調査対象者のサンプル数を増やすことと広域に調査をすることが挙げられる。対象者の選定が地域的に限定されたことである。今後の研究として、調査対象者の選定について、男性保育者への調査を検討することが課題である。

## 引用・参考文献

- ベネッセ教育総合研究所, 2022, 『第6回幼児の生活アンケート報告書』  
[https://berd.benesse.jp/up\\_images/research/WEB%E7%94%A8\\_%E7%AC%AC6%E5%9B%9E%E5%B9%BC%E5%85%90%E3%81%AE%E7%94%9F%E6%B4%BB%E3%82%A2%E3%83%B3%E3%82%B1%E3%83%BC%E3%83%88\\_%E3%82%BF%E3%82%99%E3%82%A4%E3%82%B7%E3%82%99%E3%82%A7%E3%82%B9%E3%83%88%E7%89%88.pdf](https://berd.benesse.jp/up_images/research/WEB%E7%94%A8_%E7%AC%AC6%E5%9B%9E%E5%B9%BC%E5%85%90%E3%81%AE%E7%94%9F%E6%B4%BB%E3%82%A2%E3%83%B3%E3%82%B1%E3%83%BC%E3%83%88_%E3%82%BF%E3%82%99%E3%82%A4%E3%82%B7%E3%82%99%E3%82%A7%E3%82%B9%E3%83%88%E7%89%88.pdf)（確認2023年1月5日）。
- 樋口耕一, 2014, 『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—』 ナカニシヤ出版。
- 小椋たみ子・遠藤利彦・乙部貴幸, 2019, 『赤ちゃん学で理解する乳児の発達と保育：言葉・非認知能力な心・学ぶ力』 中央法規出版。
- 鯨岡俊, 1997, 『原初的コミュニケーションの諸相』 ミネルヴァ書房。
- 前田綾子, 2020, 「乳幼児が言葉をもつことの意味に関する一考察—保育所での長年の勤務経験を通して考えてきたこと—」 人間教育 第3号1巻, pp.1-5.
- 文部科学省 2022, 「『令和の日本型学校教育』を担う教師の要請・採用・研修等の在り方について（答申）」  
[https://www.mext.go.jp/content/20221219-mxt\\_kyoikujinzai01-1412985\\_00004-1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20221219-mxt_kyoikujinzai01-1412985_00004-1.pdf)（2023年1月5日確認）。
- 文部科学省 2011, 「コミュニケーション教育推進会議（第4回） 配付資料3教育ワーキンググループこれまでの議論の整理」  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/075/shiryo/\\_icsFiles/](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/075/shiryo/_icsFiles/)

afiedfile/2012/02/08/1309091\_3.pdf (2023年1月5日確認)。

日本経済団体連合会, 2018, 「2018年度新卒採用に関するアンケート調査結果」

[https://www.mext.go.jp/content/20201022-mxt\\_koutou01-1422495-4.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20201022-mxt_koutou01-1422495-4.pdf) (2023年1月5日確認)。

篠原陽風・小林真, 2019, 「幼児のコミュニケーション能力に関する保護者と保育者のとらえ方の違い」とやま発達福祉学年報, 第10号, pp.21-26.

# **A Study of responsive teaching of Communication Ability of Young Children**

## **- A Text Analysis of Open-Ended Survey Questions of Parents and Nursery School Teachers -**

**Masatoshi KISHI   Manzou KAKUUCHI   Daiki TODA  
Yoshie SAKUMA   Hiromi Takahashi**

### Summary

Focusing on the communication ability of young children from going to certified centers, text mining analysis was conducted based on the free description of the parents who have children aged 1 to 5 who go to certified centers for early child education and nursery school teachers. The study survey to teaching of communication ability of young children. The target of the questionnaire is parents(N=63) and nursery teachers(N=24).

Parents also felt the importance of words, but nursery teachers valued places where they could express their feelings in words. In addition, they valued interpersonal conflict scenes and interactions.

It was suggested that nursery teachers need to support conflicts even if things do not go well, and to support them while representing their children's thoughts.